



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1993 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

キリストは私たちの光

主の奉獻の祝日に

1 「靈に導かれて神殿に来ていた」(ルカ2・27)と、福音記者ルカはシメオンについて記しています。彼は「義人で、敬虔で、イスラエルの慰めを待ち望んでいた。聖靈はその人の上にあつた。彼は聖靈によって、主のキリストを見るまでは死なぬと啓示されていた。」(同2・25、26)

福音記者は、シメオンに加えてファヌエルの娘アンナのことを記し、預言者であったと言っています。アンナは寡婦になってから、「神殿を離れず、断食と祈りを行って、夜となく昼となく神に奉仕していた。」(同2・37) マリアとヨセフが「主にささげるため」(2・21) イエズスを神殿に連れてきたその時、アンナもそこにやって来たのです。

これらのことは、ベトレヘムでイエズスが生まれてから四十日目に取りました。そこで教会は、クリ

スマス後四十日目に典礼の中でこのできごとを記念するのです。私たちはシメオンやアンナと共に、この日を「主の奉獻」と呼ぶことにし、主がイスラエルと全人類のために果してくださった偉大な契約のゆえに、感謝を捧げます。

2 毎日のように教会は、靈感を受けたシメオンの言葉を繰り返して、日々の「教会の祈り」を「主よ、今こそあなたのしもべを安らかに死なせたまえ…」という彼の言葉でしめくります。シメオン、アンナと共に、私たちの目が「もう主の救いを見た」(ルカ2・30) こと、その救いが「万民のために備えられた」(2・31) ことを感謝しましょう。世界を照らす光、イエズス・キリストを目にする許しを与えられたことを、彼らと共に感謝しましょう。それは、靈に促された老シメオンが、神殿の中で語った祈りの言葉の続きです。

生後四十日の幼児を抱いた老人の姿は、実に多くのことを語っているようです。シメオンの言葉は人間の言葉で伝えられましたが、実は人間を越えたものでした。啓示と神から来る真理の、偉大さと単純素朴さの全てがこの出来事に含まれています。

3 主の奉獻の祝日の典礼は、さしくシメオンの言葉と行動の内に、預言者マラキアが数百年も前に述べた預言が成就したのを見て取りました。「見よ、私は、おまえたちに使いを送る。彼は私の前に道の妨げを除く者である。おまえたちが待ち望んでいる主は、そののちすぐ聖所においでになる。おまえたちが切に見ようと望んでいる契約の天使が近づいてくる。」(マラキア3・1) シメオンとアンナは、この預言の成就の、最初の証人でした。

彼らは内なる信仰の目を大きく見開き、長く待ち望んでいたお方が主の民の神殿においでになるのを見届けました。その時主は小さな幼児にすぎず、

その来臨は生後四十日目の他のイスラエルの子供たちと変わるところはありませんでした。しかしマラキアは問いかけます。「だが彼の来られる日に耐えられようか。彼が現れるとき、だがが立ったまままでおられようか。」(3・2)

4 幼子を腕に抱いたシメオンは、マリアに向かって口を開きました。その言葉には、あの激しい預言の響きがこだましているかのようでした。「この子は、イスラエルの多くの人があるいは倒れあるいは立ち上がるために、逆らいのしるしとして立つ人です。」(ルカ2・34)

聖なる老人の最後の言葉は、母マリア自身に関するものでした。「そうして、多くの人のひそかな思いが明らかにされるのです。あなたの心も、剣で貫かれるでしょう。」(同2・35)

これを聞くと、驚かすにはいられません。生後四十日目にして、メシアに関する全ての真理が啓示されたのです。シメオンの言葉は、新しい永遠の契約の過越の成就と

なる、キリストの秘義への洞察力あふれる預言です。カルワリオの十字架へと至る、「逆らいのしるしとして立つ人。」(…)

5 「あなたの心も、剣で貫かれるでしょう。」(ルカ2・35) この預言的な言葉で、シメオンはキリストの秘義とマリアの母性とのつながりを示しました。(…) 私たちもまた、「教会憲章」の勧めに従い、神の御母の信仰をより深く知るよう努めます。聖母は信仰によって私たちに「先立ち」、諸民族、各人、各家庭、宗教共同体の先頭に立つて霊的巡礼の旅をお続けになったのですから。

(…) どうか皆さんの生涯が、神の御母の模範にならない、「キリストと共に神の中に隠され」(コロサイ3・3) たものでありますように。

神の中に「隠れる」ことによつて、皆さんの召し出しが地の果てまで、現代人の心の奥底に特別な主の「顕現」(公現) をもたらしますように。アーメン。

病者の日

創設される (教皇様の書簡)

医療使徒職評議会よりの提案を受け、また多くの司教会議や内外のカトリック組織から表明された要望に従い、「世界病者の日」を設けることに決めました。この日は毎年2月11日、すなわち典礼暦年ではルルドの聖母の祝日に当たりますが、すでにいくつ

かの国や地域で自発的に行われ、司牧上まことに価値ある実りをもたらしている「病者の日」の制定を全教会共同体に広めることは、何よりも時宜にかなったことと考えます。

教会は、何世紀にも渡ってキリストの模範に倣い、病人や苦しむ人に仕えることを自らに不可欠の使命と心得てきました。(ドレンツイウム・オミヌム)「人間の苦しみ」1番)「今日、教会は、全人類、特に弱い人々や病人の人々を愛情をもって温かく迎えることによって、この重大な時期にその使命を実践しています。」

「信徒の召命と使命」38番) さらに教会は、キリストとの一致のうちに味わわれ、贖いの核心にふれる苦しみを神に捧げることには救いをもたらす価値がある、と強調してやみません。(レデンブトリス・ミッシオ「贖い主の使命」78番参照)

したがって、年に一度「世界病者の日」を記念することは、まず神の民全体に、そしてあまたのカトリック医療団体と市民社会自身に対して、病人が可能なかぎり最善の治療を受けられるよう保障すること、病苦を単なる人間的レベルにとどめず、何よりも超自然的レベルにまで引き上げられるよう援助することの必要性を、より深く悟らせてくれます。さらには、特に教区と、また各種キリスト教共同体や修道会をして、医療という使徒職への参加を促すこと、ホ

ランティアたちの貴重な活動をさらに実りあらしめること、医療関係者のための霊的・道徳的訓練の重要性を認識すること、そして最後に、病人にとって宗教上の世話がいかに大切であるかを、教区や修道会の司祭たち、また苦しむ病人の傍らで生活し、働く司祭たちにもっと理解してもらうことが必要であることを。

私は一九八四年二月十一日に発表した教皇書簡「サルヴィフィチ・ドロリス」の中で人間の苦しみのキリスト教的意味について述べましたが、翌年の同じ日に、教皇庁医療使徒職評議会を創設しました。この日を「世界病者の日」と定めるのは意義あることと確信しています。実際、「私たちは、十字架の傍らに立つておられるキリストの御母マリアと共に、現代の人々の全ての十字架の傍らに立ち止る」(同書簡31番)のです。また、ルルドはキリスト信者の最も愛するマリア聖堂であると同時に、贖いとして受け入れられ、捧げられた苦しみを特徴とする、希望と恩寵の場所であり、シンボルでもあります。

そういう訳で、「世界病者の日」が制定されたことを医療使徒職評議会の責任者の方々、並びに広大な医療・衛生という分野に携わる内外の機関に通知していただきたいと思います。地域の状況に応じ、全ての神の民、司祭、修道者、信徒の皆さんがこの日を祝ってくださいますように。

(...)「世界病者の日」が特別な祈りと分かち合いの日となり、各自の苦しみを教会のために捧げ、また病む兄弟姉妹たちの中に、苦しみ、死を去り、復活して人類に救いをもたらしたキリストの御顔をみる事ができますように。

この日の制定と発展のために皆さんが一致協力してくださることを願いつつ、「病人の

苦しみは人類への挑戦

第一回世界病者の日に向けての教皇メッセージ

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。キリスト教共同体はつねに病人に対して特別な注意を払い、さまざま宣言の中で世界の苦しみに注目してきました。このよう

な長い伝統にならない、全教会は新たな奉仕の精神をもって、苦しみと病という大きな神秘を前に、この日を成長のための特別な機会として、良く聞き、考え、効果的に参加しようとする意向で、第一回世界病者の日を迎えようとしています。一九九三年二月を第一回とするこの日は、今後毎年、ルルドの聖母の祝日に祝われます。ルルドの祝日は、全世界の信者が「特別な祈りと分かち合いの日となり、各自の苦しみを教会のために捧げ、また病に伏す兄弟姉妹たちの中に、苦しみ、死を去り、復活して人類の救いをもたらしたキリストの御顔を見」ようと努める日だからです。

回復」聖マリアの母としての取り次ぎと、病院及び医療関係者の保護聖人神のヨハネとレリスのカミルスの取次に依り頼みます。聖母と聖人たちが、現代世界の最も必要とする効果的な医療使徒職の普及を助けてくださいますように。病人のために働く全ての人々に、教皇の祝福を送ります。一九九二年五月十三日、パチカンにて。

「病者の日」設置を通過した書簡(92.5.13) この日は善意の人々全てのためのものです。まことに、苦しみにという現実、そして病に伏す人を肉体と精神の両面から助ける必要性は、信者のみならず、死という限界を課せられた全人類に対し、基本的な問題を突き付けています。

第一回世界病者の日を迎える私たちが、いくつかの点で劇的な状況にいるのは、残念なことです。この数ヶ月間に起った出来事は、すぐにも神の助けを祈り求めなければならぬのはもちろんのこと、苦しみのさ中において、もう待てない人々を助けるため、新たにすみやかな手段を講じるべきことを示しています。

病人・苦しむ人々と私たち 私たちの眼前には、個人と民族

全体の、非常に悲惨なありさまが広がっています。戦争や紛争に引き裂かれ、たやすく避け得るはずの苦難に押しひしがれる人々です。懇願の表情を浮かべたこんなにも多くの人々、特に子供たちから目をそらすことができませんか。利己主義や暴力のため、自らの意志に反してありとあらゆる困難に取り囲まれ、自分の殻に閉じ込められた人々です。また、病院や診療所、障害者のためのセンターや養護施設で、また自宅で、しばしば無視され、適切な処置を受けられず、時には十分な手当てもされないままに症状を悪化させて、カルワリオの苦しみを忍ぶ人々のことを忘れられるでしょうか。

日常生活で経験する病は、自然の生命力の挫折のように感じられますが、信者にとつては、この新たな困難な状況を信仰の目で「読む」ように、という呼びかけになります。信仰がなければ、どうして試みの時、苦痛の中に建設的な役割を見出すことができましよう。苦痛、不安、死すべき私たちの状態に付きまとう身体と精神の病に、どうして意義と価値を認められましよう。科学や技術がいかに進歩しようとも厳として残る老化と死に対し、どんな答えを出すことができるでしょう。

そうです。人となったみことば、人類の贖い主、死に打ち勝ったキリストにおいてのみ、こうした根本的な問いに納得のできる答えを見つけることができます。

※ 列聖請願者より配付を依頼されている福者ホセマリア・エスクリバーの「ニュースレター」24ページカラー版特別号が発行されます。ご希望の方は、送付手数料二五〇円を添えて、精道教育促進協会までお申し込みください。

「鍛」(きたえる)

ホセマリア・エスクリバー著 新田壮一郎訳

定価一六〇〇円 千三〇〇円

キリスト者としての生活を真剣に生きんと願う全ての人々にお勧めします。

キリストの死と復活の光に照らすとき、病はもはや否定的でしかない出来事ではなく、「神の訪れ」すなわち「世界の中で愛を放射させるために、すなわち隣人に向かつて愛の業を誕生させるために、また全人類の文明を(愛の文明)に変容させる」(使徒書簡「苦しみ」のキリスト教的意味」30番)ための機会となるでしょう。

教会史とキリスト教の霊性の歴史は、これに関する非常に広範な証明となっています。何世紀にも渡って、英雄性に満ちた輝かしいページがつづられて来ました。キリストと一致して苦しみを受け入れ、捧げてきた人々によるものです。これに劣らぬすばらしい記録を、貧しい人、病む人へのつつましい奉仕のうちにたどることが出来ます。病人の痛めつけられた肉体、貧しい人々の中に、十字架上のキリストを見い出せます。



世界病者の日は、その準備、実行、目的のいずれにおいても、たとえ賞賛すべきものであれ特定の意図に合せた単なる外面的なショーではありません。それは人々の良心を呼び覚まして、苦しむ人々への人間的、キリスト教的な奉仕が人々のより深い相互理解への価値ある貢献となり、そうして真の平和を築く助けとなることに気づいてもらうためなのです。

実に、平和の前提条件として、苦しんでいる人や病人に対し、公的機関や内外の組織、善意ある全ての人が特別な注意をもって臨む

ことが必要です。これはどこよりも、医療の不備が深刻な事態となっているラテン・アメリカやアジア、アフリカのような発展途上国において、重要なことです。世界病者の日を祝う教会は、この人々のために新たな努力を進めます。人的、霊的、また物質的な資源を人々の必要のために捧げることで、現代の不正な状況を一掃できるように念じながら。

人間を超越的な視点から見る

この点に関し、特に政府当局者、科学者、また直接病人と接する人々に、申し上げたいことがあります。皆さんの奉仕が決して血の通わぬ官僚的なものになりませんように！ また、公の財源が浪費や不当な使われ方をされないよう、皆が注意しなければなりません。賢明かつ公正に用いられるなら、お金は病気を防ぎ、全ての病人に必要な看護を受けさせるために役立ちます。

今日、医学と医療に人間性を求める声が大きくなっています。確たる応答が必要です。医療をもつと人間的できめ細かなものとするためには、人間に対する超越的なビジョン、すなわち生命の尊厳と神聖さを強調し、病む人の中に神の姿と神の子のイメージを見い出すビジョンが不可欠となります。人間誰しも病と痛みを免れません。苦しむ人への愛は、文明と民度の高さを示す印であり、指標です。全世界で病に伏しておられる皆

さん、世界病者の日の主役である皆さんのために、この日が生ける慰めの主の訪れを告げるものとなりますように。不動の信仰をもつて受け入れ、忍んでおられる皆さんの苦しみは、キリストの御苦しみと一つになってはかり知れない価値を持ち、教会の生命と人類の善のために役立ちます。

医療関係者の皆さん、みなさん

はまことに尊く賞賛に価する、模範とすべき正義と愛の証人となるよう召されています。この日が、細心の心遣いを要する奉仕を続けていく上で新たなよい刺激となりますように。人間の深い価値に対して寛大に心を開き、人間の尊厳を尊び、その始まりから自然の終りに至るまで生命を擁護してください。

司牧者の皆さん、教会共同体の

さまざまメンバーの皆さん、ボランティアの方々、そしてとりわけ医療使徒職に携わっておられる皆さん。この日が皆さんを奮い立たせ、試練と苦難に会う人類に仕えんとする皆さんに、新たな献身のための励ましとなりますように。



ルルドの聖母の祝日に、ピレネーのふもとにあるその

聖堂は苦しむ人々の宮となつていますが、聖母がカルワリオでなされたように、私たちも御子の十字架のもとに近づきます。それは数多くの兄弟姉妹たちの、苦痛と孤独の十字架です。彼らを慰め、苦しみを分かち合い、それを生命の主にお捧げします。全教会との霊

的一致のうちに。

願わくは聖なる処女、「病人の回復」生きたる者の御母」が私たちの支え、希望となつてくださいますように。世界病者の日を通じて、試練のうちにいる人々への共感と献身を増して行くことができますように。全ての顔から涙がぬぐい去られる(イザヤ25・8参照) 希

塗油は霊的癒しをもたらし

教会シリーズ 11

1 司祭の共同体は、病者の塗油の秘跡において、特に意味深い形で実現され、また示されていると言えます。これについて使徒聖ヤコブは次のように記しています。「病気の人がいるなら、その人は教会の長老たちを呼べ。彼らは主の御名によって油を塗ってから祈りをとなえる。そして信仰による祈りは病気の人を救う。主は彼を立たせ、もし罪を犯しているなら、それを赦されるであろう。」(ヤコブ5・14-15)

ヤコブの手紙は、病人自ら、もしくはその家族が司祭の来訪を依頼するよう勧めています。「聖徒たち」つまり聖霊によって祝別された人々が享受する生命の共同体に個人的に加わるというかたちで共通司祭職が実現していると言えましょう。しかしヤコブは、塗油によって病人を助けるのは「長老

たち」が果たすべき司祭職の義務であると教えています。この場合にも、調和のうちに、生き生きと秘跡に加わることに伴って、司祭的共同体が実現されているのです。

2 イエズスが病人に示された思いやりと心遣いがこの秘跡の基礎になっています。福音史家たちが伝えるように、公生活の始めから、イエズスは救いを求める病人や貧困者や苦しむ人に対して大きな愛と心からの憐れみを示されました。「多くの病氣とさまざまなわずらいを治された。」(マテオ9・35)

多くの奇跡的な治癒は、イエズスが人類に与えようと望まれた救いのしるしだったので。イエズスは癒しと救いが明らかに関連していることをたびたびお示しになりました。たとえば、中風の人の罪を赦された後、奇跡を起されま

不変の教え

したが、それは、「人の子が地上で罪をゆるす権威を持つている」(マルコ2・10)ことを知らせるためでした。イエズスの計画は体の回復だけにとどまらず、心の癒し、霊的な救いを目指していたのです。

3 イエズスのこのようなみわの中に入っていました。それはイザヤの預言が、病人を癒すこと、貧しい人を助けることに関連してすでに伝えていたことです。(イザヤ61・1以下、ルカ4・18、19参照) 地上での生活中もイエズスは、この使命を弟子たちにかかせ、彼らが貧しい人々を助け、中でも病人を癒すことを望まれました。福音史家マテオが次のように記しています。「イエズスは十二人の弟子を呼んで、汚れた霊を追い出し、どんな病も患いも治す権威を与えられた。」(10・1)

そしてマルコも伝えていきます。「弟子たちは多くの悪魔を追い出し、油を塗っておびただしい数の病人を治した。」(6・13) 初代教会において、イエズスの救い主としての使命の中でも特にこの面が強調され、福音書の多くのページがそれにさかされただけでなく、弟子や使徒たちにもその仕事が使命として委ねられたことが力説されているのは、とても興味深いことです。

4 教会は、イエズスが病人に對して示された特別の心遣いを実践し、病人の世話を寛大に

果す一方で、病者の塗油の秘跡を通してキリストの愛による癒しを与え続けます。

病氣は単なる肉体的な悪ではありません。病とは、精神的・霊的な試みの時でもあるのです。病人には試練に勝つための内的な力が必要です。キリストは病者の塗油の秘跡を通して愛を示し、病人に必要な内的な力を与えられます。善いサマリヤ人のたとえで、エリコに下ろうとした不運な男の傷に注がれた油は、体を治す手段でした。秘跡において司祭が注ぐ油は、恩寵と霊的な救いのしるしとなります。

5 ヤコブは、塗油と司祭の祈りもたらずと記します。トリエント公会議(DS196)は、これに関して、病者の秘跡は聖霊の恩寵を与えること、また聖霊による内的な塗油によって病人の靈魂を罪と罪のなごりから解放すると同時に、あわれみ深い神の慈しみに對する信頼を注ぎ込み、慰めと力を与えることと述べています。このようにして病人は、悪魔の誘惑に抵抗し、病氣の苦しみに耐える力を与えられるのです。さらに、靈魂の救いに役立つなら、塗油によって肉体的に病氣が癒されることもあります。これが教会の教えですが、これについてはトリエント公会議が詳しく述べています。

というわけで、病者の秘跡は病人に勇氣と抵抗力を増す恩寵を与え、心構えができていれば、キリス

ストの御力によって秘跡が働き、罪の赦しなどの霊的な癒しと、時には肉体的な癒しをもたらします。これは秘跡の第一の目的ではありませんが、もし実際にそれが実現するときは、苦しむ人へのあふれるばかりの愛と慈悲の中にキリストの救いを見ることが出来ます。それをキリストは地上の生活の間に表示されました。そして今でもキリストの聖心は同じ愛で脈打っており、天国の新しい生命に入られた今も同じく、聖霊の御力をおととして人間に愛が注がれます。

6 従って病者の秘跡は、重い病氣にかかった時も、老齢で体が弱った時も、そこにいつもキリストが現存しておられることを示しています。教会の「長老たち」はこの秘跡を授けるために呼ばれるのです。

この秘跡は伝統的に「終油の秘跡」と呼ばれていました。臨終の人に対する秘跡と考えられていたからです。第二バチカン公会議でこの表現は使われませんでした。重い病に苦しむ人々のための秘跡と考えた方が良いでしょう。ですから、この秘跡の授与を臨終の時まで待つのは正しくありません。そんなことをすれば、塗油が靈魂として時には体にもたらす力を病人から奪うことになるでしょう。病状が重い時、病人の家族や友人は適切な時に病者の秘跡を受ける望みを表明しなければなりません。病人がはつきりと表明できなくなつていても、拒否されていたのではな

い限り、望みがあると考えなければなりません。それは、御言葉への信仰を通してキリストへの愛を表すことであり、キリストが制定された教会に委ねられた救いの手段を受け入れることを示しているからです。経験がおありでしょうが、秘跡は霊的な強さを与えて病人の心の持ちようを変え、安らぎをもたらします。この力は、特に死に際して有益です。死後の生命に至る旅路で大きな助けとなるからです。この世での生命が終る時、前もって与えられ、すでに私たちが幸いなものとして成聖の恩寵が与えられるように、毎日祈りましょう。

7 第二バチカン公会議は、病人、高齢者、臨終の人に塗油を授ける教会の責務を強調しています。「至教会」(教会憲章11)は、病人の苦しみを和らげてくださるよう主に願い、こうして全ての弱い人々にキリストの愛を示すと教えています。秘跡の授与者である司祭は、「司祭の共同体」である教会がこの責務を負っていることを示します。この共同体の中にあるメンバーは、積極的な役割を果しているメンバリーなのです。それゆえ教会は苦しむ人に、すべての神の民が救いと豊かな命にあずかるため、自らイエズス・キリストの受難と死に一致するよう切に勧めます。この秘跡の目的は、病人の個人的利益だけでなく、教会全体の霊的な成長にもあるのです。ここから病者の秘跡の真の姿が明らか

になります。それは、司祭としてキリストのいけにえにあずかる最高のかたちなのです。これについて聖パウロは次のように述べています。「私は今あなたたちのために受けた苦しみを喜び、キリストの体である教会のために、私の体をもつてキリストの苦しみの欠けた所を満たそうとする。」(コロサイ1・24)

8 病に伏す人々が教会の霊的生命発展のためにどれほど大きな貢献をしているか、これについてはもっと注目されてしかるべきです。病人、その家族、医者、看護者など、すべての人が教会の「普遍的司祭職」を行使する道に「霊的いけにえ」すなわちキリストの受難と一致した各人の苦しみを捧げてくださいますように。病人の中に苦しむキリストの姿を見出せますように。しもべについてのイザヤの預言(イザヤ53・4参照)が伝えるように、キリストは私たちの苦しみを担ってくださったのです。

私たちは、信仰と経験によって、病人の捧げる犠牲が教会にとつて実り豊かであることを知っています。神秘体の中で苦しんでいる人は、共同体全体と救い主キリストとの親密な一致にもっとも貢献している人々なのです。共同体は公会議が示すあらゆる方法で、また病人から受ける利益に感謝しつつ、病に伏す人々を助けなければなりません。(四・二九)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円
送料実費 一年予約九百円 送料六百円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393